

豊かに関わり、よりよく問題を解決しようとする児童の育成

—第6学年「持続可能な社会を生きる ～つばきッズ☆エコプロジェクト～」の実践を通して—

松山支部

1 研究の視点

- (1) 基礎・基本の定着と活用を図る指導計画の工夫
- (2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

2 実践事例

- (1) 題材名「持続可能な社会を生きる ～つばきッズ☆エコプロジェクト～」
- (2) 目標

- 自分や家族等の生活と身近な環境との関わりや環境に配慮した物の使い方を理解する。
- 物の使い方や環境に配慮した生活について、自分の生活の中から課題を見だし、解決に向けて実践し、振り返ることができる。
- 環境に配慮し、生活をよりよくしようと家族の一員としてできることを考える。

(3) 題材設定の理由

- 本学級の児童（29名）は、家庭科への興味・関心が高く、これまで掃除、洗濯、裁縫など実践的・体験的活動に意欲的に取り組んできた。また、第5学年では、NPO法人えひめ消費者ネット「ひめまる」との連携を図り、家庭科や総合的な学習の時間において、消費者として環境に配慮した買い物の仕方や、SDGs（持続可能な開発目標）について学んでいる。

本題材の学習に当たり、児童の意識調査を行った。（令和2年8月実施）

1 家庭科の学習をして、できるようになったことが増えましたか。	・増えた 36%	・やや増えた 50%
	・あまり増えていない 10%	・増えていない 4%
2 家庭科で学習したことを生かし、生活をよりよくしようと工夫していますか。	・工夫している 14%	・やや工夫している 18%
	・あまり工夫していない 29%	・工夫していない 39%
3 環境にやさしい生活を実践していますか。	・実践している 25%	・やや実践している 36%
	・あまり実践していない 25%	・実践していない 14%
4 自分の行動とSDGsの取組とは、つながりがあると思いますか。	・つながりがある 18%	・ややつながりがある 14%
	・あまりつながりがない 39%	・つながりがない 29%

アンケートの結果から、8割以上の児童は家庭科学習を通して「できることが増えた」という有用感を感じている一方で、その知識・技能を実生活に生かし、工夫した生活ができていない児童は約3割にとどまっていることが分かった。また、約6割の児童は、前学年までの学びを生かし、環境に配慮した取組を日々の生活の中で実践することができている。しかし、自分の日々の実践が、SDGsなど環境問題解決へとつながっていることを意識できている児童は約3割である。

- 本題材は、家庭科や他教科での学習を踏まえて、自分の生活が身近な環境に与える影響に気づき、持続可能な社会の構築に向けて、主体的に工夫しながら生活しようとする意欲の向上や、それを支える知識・技能の定着を図ることがねらいである。学習指導要領では、「生活の営みに係る見方・考え方」の一つとして「持続可能な社会の構築」があげられている。また、総則の中にも、「豊かな創造性を備え持続可能な社会の作り手となることが期待される児童」と明記されており、持続可能な社会の構築の視点に立った児童の見方・考え方を育てることが求められている。第5学年からの学びの連続性を生かし教科横断的に学習していくことで、地球規模の未来志向の視点を持ちながら、今現在の身近な出来事や身の回りの生活の仕方に目を向け、「自分にできることは何か」「自分のすべきことは何か」を考え、実践する力が育まれると考える。
- 指導に当たっては、「つばきッズ☆エコプロジェクト」という題材を貫く学習課題を提示し、「計画・実践・評価・改善」を繰り返しながら、長期的に家庭での実践に取り組ませる。朝の会では前日の実践を振り返る時間を設け、実践のバロメーターとなる「エコポイント」を累積していく。また、学年掲示板を活用して実践したことを掲示することで、児童の取組を可視化し、実践意欲の継続・向上につなげる。さらに、同時期に行う調理実習においても、エコの観点から実習を考えることで、様々な生活場面で活用できるようにする。題材終盤には、実践報告会を行い、自分たちの実践がSDGsの17の目標のうちどれとつながっているかを考えさせることで、一人一人の小さな行動が世界の環境問題解決へとつながっていることを実感させたい。

本時は、約3週間の家庭での実践を振り返って評価し、環境に配慮したよりよい生活を送るための自分の生活の在り方について考える場面である。友達との協働学習を通して、自分では気付かなかった多様な取組があることや、家庭科での既習事項を生かし考え工夫することで、自分たちにできる実践がまだ多くあることに気付かせたい。その際、児童の思考を深め、気付きを促すために、愛媛県地球温暖化防止推進員をゲストティーチャーとして招き、問題提起をしていただきながら指導に当たる。また、思考ツールの一つである座標軸を活用し、自分がこれまで取り組んできた実践や新たな実践アイデアを、「簡単だ」「めんどうだ」「毎日」「時々」の4つの視点から付箋紙を用いて整理していく。そして、自分の生活の中でのバランスを考え、無理なくできる取組を継続していくことの大切さに気付かせるとともに、自分にできることを増やそうとする態度を育てたい。

(4) 指導と評価の計画

学習過程	時間	学習活動	評価規準・評価方法		
			知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
出合い	1	生活と環境のつながりを考えよう ・自分たちの生活が、資源や環境にどのような影響を及ぼしているか考える。	自分の生活と身近な環境との関わりについて理解している。 (観察・ワークシート)		
	1	生活を振り返り、環境のために自分にできることを考えよう ・自分自身のこれまでの生活を振り返り、問題点を見付ける。 ・エコプロジェクト実践計画を立てる。		環境に配慮した生活について問題を見だし、課題を設定すると共に工夫して実践計画を立てている。 (実践計画表)	環境に配慮した生活について、課題の解決に向けて主体的に実践しようとしている。 (実践計画表)
生かす	課外	エコプロジェクトを実践しよう ・計画に沿って、家庭で実践する。			
聴き合い・学び合い	1 (本時)	エコプロジェクトをよりよくしよう ・これまでの実践を振り返り、評価・改善する。 ・環境に配慮した生活のための工夫について考える。		環境に配慮した生活について、実践を評価したり、改善したりしている。 (観察・ワークシート・実践計画表)	
生かす	課外	エコプロジェクトを実践しよう ・新たな実践を取り入れ、家庭で実践する。			

1	エコプロジェクト実践報告会をしよう ・実践について伝え合い、今後の生活と環境との関わりについてまとめる。	自分の生活と環境との関わりや、環境に配慮した物の使い方などについて理解している。 (ワークシート・実践計画表)	環境に配慮した生活について課題解決に向けた一連の活動を振り返って、改善しようとしている。 (観察・ワークシート・実践計画表)
---	--	--	---

(5) 本時の指導 (3 / 4)

- ア 目標 環境に配慮した生活について家庭での実践を振り返り、家族の一員として生活をよりよくするために自分の生活の在り方について考える。
- イ 準備物 ワークシート、実践計画表、付箋紙、ヒントカード、掲示用短冊、マーカー
- ウ 展開

学習活動	主な発問 (□) と予想される児童の反応	○指導上の留意点 ◎評価
出合い	1 家庭での実践を振り返り、学習課題を確認する。	○ 座標軸を用い、自分の実践を可視化して振り返らせる。 ○ ゲストティーチャーに、これまでの実践を称揚していただき、児童の本時への学習意欲を高める。 ○ ゲストティーチャーの専門的な立場から問題提起していただき、児童が課題意識を明確にもつことができるようにする。 ○ アイデアを付箋紙に書き、座標軸上に位置付けさせることで、児童の思考の手助けとする。 ○ 教科書を活用し、これまでの学習を基にしたアイデアを考えられるようにする。 ○ 具体的なアイデアとなるように助言をする。 ◎ 環境に配慮した生活について考え、工夫している。 (観察・ワークシート)
	2 新たな実践アイデアを考える。 (1) 個人 (2) 班	
	(3) 全体	
聴き合い・学び合い	3 学習のまとめをする。	○ アイデアを共有することで取り組みやすくするだけでなく、できることを増やそうとする意識をもたせる。 ○ 同じような取組でも、人によって様々な捉え方があることに気付かせる。 ○ 環境と自分の生活とのつながりを意識し、実践し続けることの大切さをおさえる。
	4 学習を振り返る。	
生かす	今日学習を振り返って、これからどのように取り組んでいきたいですか。 ・ 今日考えたアイデアを早速実践してみよう	○ ゲストティーチャーの話を聞くことで、児童に持続可能な社会の中での自分の在り方を再認識させ、実践意欲の継

う。
 ・友達の実践を真似てやってみたいな。
 ・今日考えたことを家族にも伝えて、一緒に取り組んでいこう。

続を図る。
 ◎ 自分の実践を振り返り、評価、改善している。
 (ワークシート・実践計画表)

(6) 活動の実際と考察

ア 基礎・基本の定着と活用を図る指導計画の工夫

(ア) 題材構成の工夫

本学年の児童は、第5学年のときにNPO法人と連携し、家庭科と総合的な学習の時間を関連付けながら、消費者として環境に配慮した買い物の仕方やSDGs（持続可能な開発目標）について学んできた。本学年の指導においても、第5学年からの学びの連続性を生かすとともに、「つばきッズ☆エコプロジェクト」という問題解決型の課題を設定することで、児童が自らの生活をよりよくするための工夫を考え実践し、評価・改善をしながら家庭科学習に関する基礎・基本を定着できるようにした。

また、実践的・体験的な活動の充実を図り、児童が環境に配慮したエコ生活を家庭で長期的に実践できるよう題材を構成した。家庭での実践は、実践計画表に日々の取組を記録し、毎日朝の会で振り返りを行った（資料1）。頑張りを可視化したことで、児童は家庭科の授業で学んだことを生かして実践することのよさを実感していた。

(イ) ゲストティーチャーとの連携

本題材では、愛媛県地球温暖化防止推進員の方にゲストティーチャーとして携わっていただいた(写真1)。まず、題材の導入でゲストティーチャーからのメッセージ動画を児童に見せた。これまでのSDGsへの取組について認めていただくとともに、

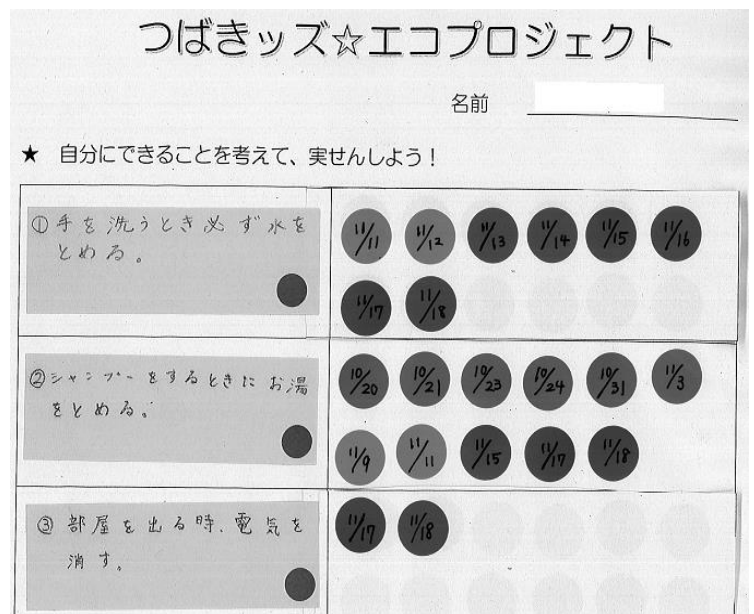
「家庭科の学習で学んだことも日々の実践に生かしてみよう。」という投げ掛けを受け、家庭科学習を通して、実践に生かすための知識・技能の習得をするという目的意識をもたせた。

本時の導入では、これまでの取組について称揚していただいた後、「持続可能な社会」というキーワードを専門的な立場から押さえ、問題提起をしていただいた。その後、ゲストティーチャーの家庭での取組を聞いたりアドバイスを受けたりしながら、特に3Rの視点からエコにつながる実践のアイデアが多く出された。

イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(イ) 思考ツールの活用

本時では、思考ツールの一つである座標軸を用いて取組を振り返らせた(資料3)。座標軸を用いることで、事柄同士の位置関係やどの事象に事柄が集中しているのかなどを可視化することができ、児童が思考を整理することに役立った。「簡単だ」「めんどうだ」「毎日」「時々」の4つの視点からこれまでの実践を振り返ったり、新しく考えたアイデアを座標軸に加えていっ

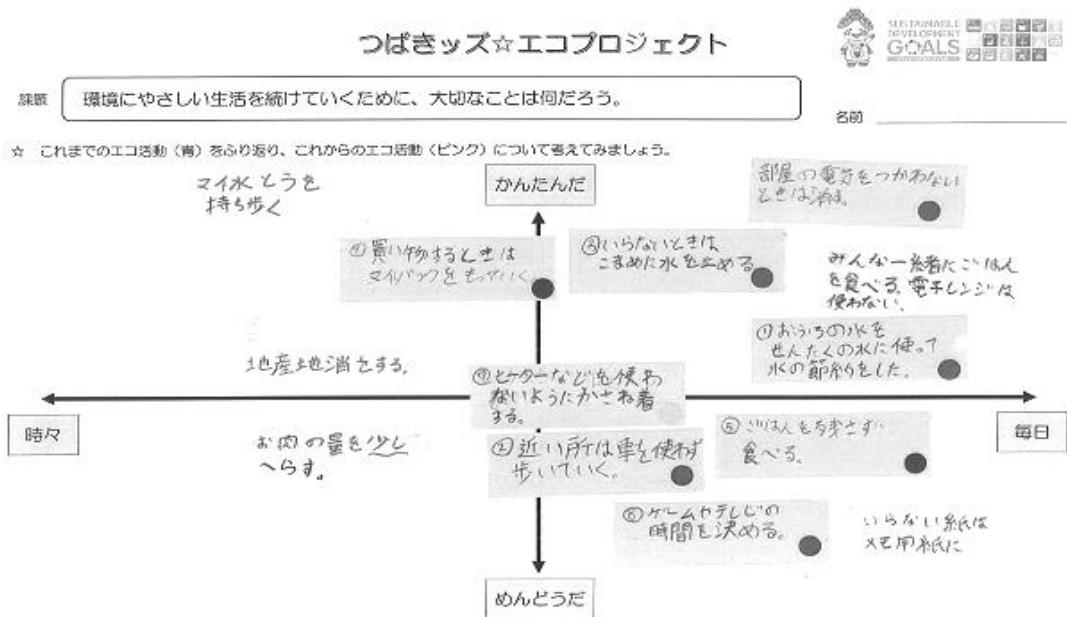


<資料1 実践計画表>



<写真1 ゲストティーチャーとの関わり>

たりすることで、自分自身の取組の傾向を掴むことができた。本時までの実践で、「めんどろだ」の軸に自分の取組が集中していた児童は、友達との交流を通して、「毎日」できる「簡単なこと」を増やすことが大切であることに気付くことができた。



<資料2 座標軸を使った振り返り>

(イ) 実践を促すための環境の整備

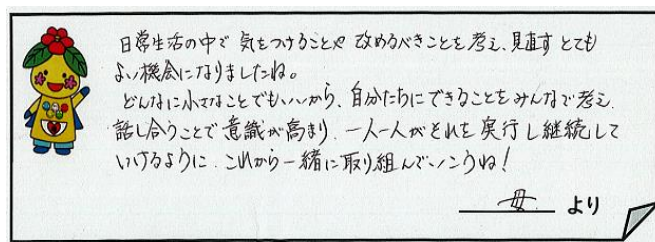
学年掲示板や多目的スペースを活用して、「エコひろば」を設けた。学年掲示板には、各学級のエコポイントや児童の取組を掲示した(写真2)。各学級のエコポイントは、学年で一体となってプロジェクトに取り組む意識を育む一方で、他学級に負けたくないという意識も生まれ、児童の実践意欲のさらなる向上へとつながった。児童の取組を衣食住に分類することで、家庭科学習のどの分野を生かした取組かを意識できるようにした。多目的スペースには、図書室から環境に関する本を集め、児童が主体的に課題解決できるように環境を整えた(資料3)。授業中の活用だけでなく、休み時間や昼休みにも本を読んだり児童同士が交流したりする場となった。



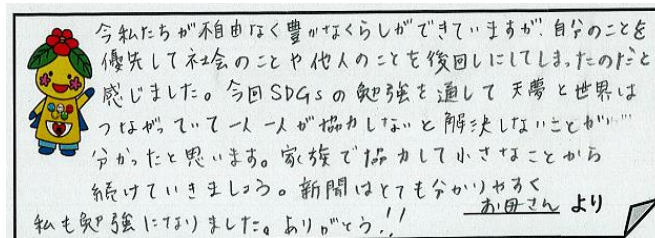
<写真2 学年掲示板>

(ウ) 家庭との連携

学年だよりを活用して、各家庭に本題材の学習についての協力を依頼した。家族で一緒に取り組んでいただいたり、取組のアイデアを提示して下さったりするなど、多くの家庭での協力があり学習の充実につながった。また、同時期に行った食に関する題材では、学校での調理実習を生かして家庭で炒める調理の実践を行った。その際も、環境に配慮した調理について家庭で日々工夫していることをアドバイスしてもらった児童が多くいた。題材終盤では、学習の積み重ねを記録したポートフォリオやエコ新聞を家庭に持ち帰らせ、学校での学習について保護者に知らせた。多くの保護者が児童の実践に対して励みとなるコメントを書いてくださり、児童の達成感が高まった(資料4)。



<資料3 図書コーナー>



<資料4 保護者からのコメント>

3 成果と課題

- 他教科等とのつながりを生かして題材構成を工夫したことで、児童が自らの生活から課題を見だし、実践的・体験的な活動を通して問題解決へと向かう学習を行うことができた。また、既習事項を生かして実践を重ねたことで、家庭科における知識・技能の定着にもつながった。
- ゲストティーチャーと連携して専門的な立場からの助言を受けたことで、児童が様々な工夫を考えることができ、実践の幅が広がった。
- 思考ツールとして付箋紙や座標軸を活用することで、自分の思考を可視化し、客観的に捉えながら学習を進めることができた。
- 児童の実践を「エコポイント」として可視化したり、学年掲示板等の掲示を活用したりすることで、児童の意欲の高揚や持続化を図ることができた。
- 家庭と連携を図ったことで、児童が日々の生活の中で主体的に問題解決に取り組むための意欲につながるとともに、自己有用感の向上にもつながった。
- 「持続可能な社会」という視点についての理解は、様々な教科と関連付けて扱うことでより深められるが、それぞれの教科としてのねらいを達成するという視点を欠かさず指導に当たることが重要である。
- 座標軸の活用は個人では有効であったが、班活動や全体の場合では、より有効な方法(座標軸における個人差に着目させる、衣食住での分類等)を考える必要がある。
- 本実践では全家庭の協力を得ることができたが、学級の実態によっては児童の家庭状況を十分に把握した上で学習活動を行うよう、配慮が必要である。